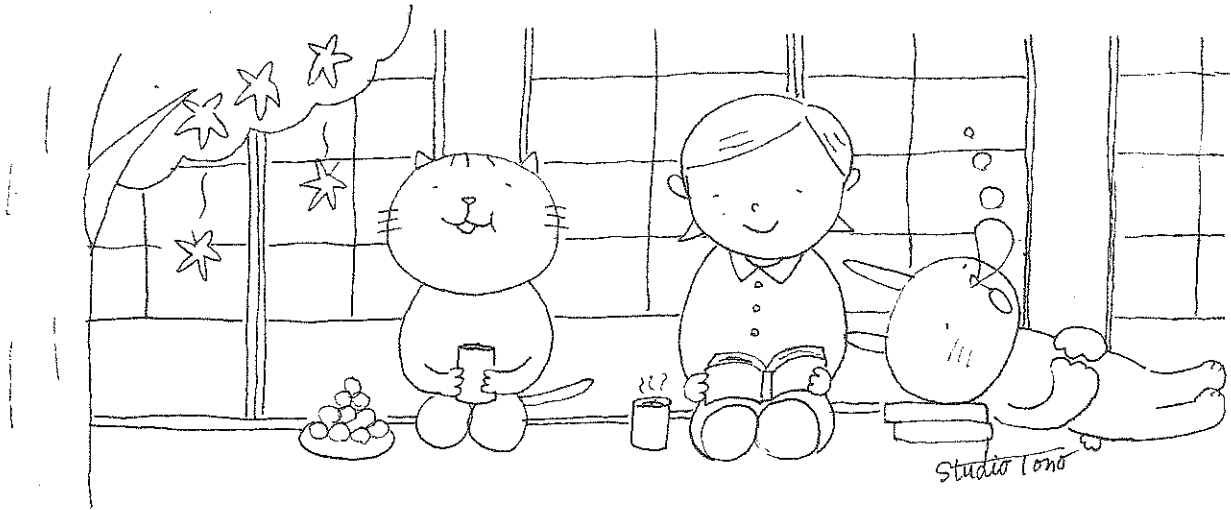
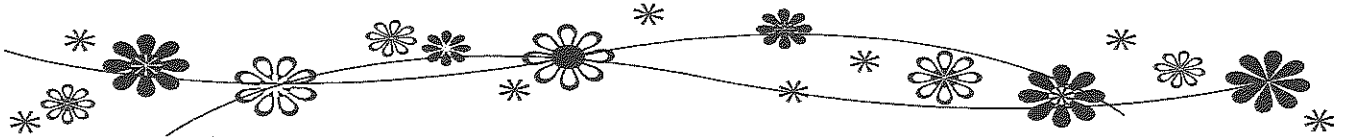




ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～



彼女が好きなものはホモであって僕ではない

浅原ナオト 著 KADOKAWA 2018年 (K:エッセイ・文学)



とうとう台湾で同性婚が認められた。SNS では祝福と「早く日本も続け」という意見をたくさん見た。私もまったく同じ気持ちだった。しかし今は少し違う。

この作品は「どうしても同性しか愛せない、しかしそれでも異性と結婚して家庭を持つような『普通』の生活をしたい。」という「普通でない自分」と「普通でいたい自分」の葛藤が大きなテーマだ。高校生でゲイの安藤君が、何も知らない同級生の三浦さんの告白を受け入れてしまう。彼女はイマドキの「腐女子」で、わかる人にはわかるクスリとくる腐女子あるあるやオタクあるある、BL あるあるな小ネタも面白い。映画「ボヘミアン・ラプソディ」で一躍話題となったイギリスのロックバンド「QUEEN」の楽曲が物語を更に彩る。

日本の社会が「普通」を教え続ける限り、例えば法律で同性婚を認めたとしても、安藤君のような葛藤を抱える人をは減らすことは難しいのでは。パンチのあるタイトルだが、重いテーマを多くの人にキャッチーに伝える作品だ。

(菊山)

女性俳句の光と影

宇多喜代子 著 NHK出版 2008年 (K:文学・エッセイ)

いま、俳句がブームである。テレビに俳句の人気番組があり、書店には俳句入門書が溢れ、各地で句会が盛んである。句会では女性が7~8割を占め、新聞の投稿欄にも女性の名前が目立つ。しかし、俳句の世界において女性が確固たる地位を占めるようになったのはそれほど昔のことではない。この本はNHK俳句でおなじみの筆者が、女性俳句作家の歴史を作品とともにわかりやすく紹介している。

「夏みかん酸っぱいままさら純潔など」(鈴木しづ子)、「短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎(すてつちまおか)」(竹下しづの女)・・こんな感性に圧倒されるばかり。俳句愛好家以外の方にもおすすめであります。

(紀生)



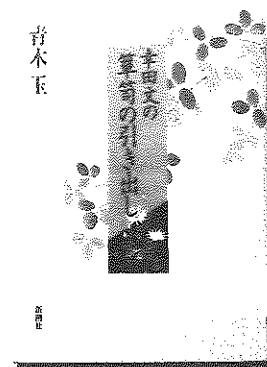
幸田文の筆筒の引き出し

青木玉 著 新潮社 1995年 (K:エッセイ・文学)

この本は随筆家・幸田文氏を母とする著者が、母の筆筒に遺された着物にまつわるエピソードをまとめたものである。本書を読めば、幸田文氏が着物を愛し、造詣が深かった事、着物を作る時に着て行く時間、場所・目的に合わす為、生地・柄・色合い等も細かく専門家や著者に指示していた様子がうかがえる。又着なくなった着物のリメイクの応用範囲の広さに学ぶ事が多い。文氏の何事にも即決即断の心意気やすべての生活が小気味良く感じられた。

玉さんの着る事の出来なかった白地の振袖は、30年後静かに終る母・文氏への衣装となった。この話は母から娘へ、娘から母へと着物に対する思い入れが繋がっていると深く思いました。

(玲)



「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を。

小川たまか 著 タバブックス 2018年 (A:フェミニズム)



以下のような経験をされた方はいませんか。職場で男女平等に与えられているはずの権利を遠慮して使わなかった。女性を蔑視したような表現を見聞きして、不愉快になったが意見しなかった。痴漢に遭ったが申告しなかった。特に日本では、私たちはこのように波風を立てないようにすれば、一見平等で幸せに生きていけるように思われます。しかし、本当はどうなのでしょう。本書では、ここから一歩踏み出した先が書かれています。それが、『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会』と表現されています。著者の細やかな取材と調査に基づき、様々な問題をわかりやすく書かれています。読み進めるうちに社会の現実と理不尽さに絶望しそうにもなります。しかし、ここに書かれているあらゆる問題は自分にも関係のあることです。ぜひ一度読んでみて下さい。

(A.T.)

北欧女子オーサのニッポン再発見ローカル旅

オーサ・イエークストロム 著 KADOKAWA 2016年 (Q:コミック)

著者はスウェーデン出身で、日本の漫画が好きで漫画家となり、東京にやってきた。

スウェーデンといえば、男女平等、福祉政策が手厚い、白夜があるなど日本とは違った文化や気候などがある。そのスウェーデンと日本(東京)との違いをおかしいことではなく、不思議なこととして、朝日新聞「be」に4コマ漫画を連載している。そのシリーズもりいぶるには所載しているが、本書はその話を広げて、東京以外の日本の各地を旅行し、女子目線で地方差、文化差についてわかりやすく書いている。なかなか日本は奥深いと感じる漫画である。(か)



まず歩きたそう 女性物理学者として生きる

米沢富美子 著 岩波書店 2009年 (J:自伝・評伝)

令和元年5月18日毎日新聞朝刊「窓をあけて」に「伝説の科学者」として著者の記事が掲載されていた。今年1月になくなったとのこと。残念です。

著者が70歳に書いた本書は、理系の楽しさと、勇ましく無鉄砲に生きてきた自分を知ってもらうため執筆した。人生のモットー五項目「一、自分の能力に限界を引かない。二、まず歩きたす。三、めげない。四、優先順位をつける。五、集中力で勝負する。」を紹介し、読者が生きていく上での何かの縁よすがにしてほしいと記している。

三人の娘を育て上げ、乳がんを摘出し、夫を亡くすも、不当な女性差別と闘ってきた天才物理学者の生き様を、多くの方に知ってほしい。(はんちゃん)



生協の白石さん

白石昌則、東京農工大学の学生の皆さん 著 講談社 2005年 (O:その他)

白石協さんの

大学キャンパス内の生協に勤めていた、白石昌則さんという人が、生協の組合員からの「ひとことカード」にユーモラスに、丁寧に回答している。それをまとめた本だ。

僕が特に好きなのは、次の質問への回答。『どうやったら鳥研(野鳥研究会)に女子を入れることができますか？秘策を教えてください。さみしくて死にそうです』

さあ、あなたなら、どう答える？自分なりの回答を用意して読み進めると、面白さ倍増！かも。

『単位がほしいです』『愛は売っていないのですか？』などの無茶な「質問」に、白石さんはどう答えているか。相手の理不尽な発言にも柔軟に対応して、人間関係を円滑にする。この本にはそのヒントが詰まっている、と感じた。(やっくん)

フランス人は「若い」を愛する

賀来弓月 著 文響社 2018年 (K:エッセイ・文学)

著者は外交官退職後、フランスで体験した高齢者介護ボランティアから、フランス人と日本人の「若い」についての違いを考えた。

フランスには若いを「人生の実りと収穫の秋」と考える文化があるため、高齢期を肯定的にとらえ、最後まで楽しむ。本書ではフランス流「人生を楽しむ術」の諺や名言が随所にちりばめられている。

すばらしいエールを送ってもらえる一冊です。 (すず子)



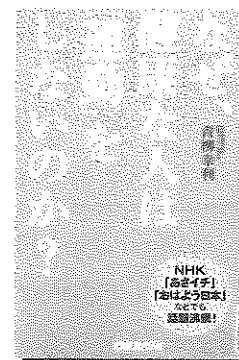
なぜ、健康な人は「運動」をしないのか？

青柳幸利 著 あさ出版 2014年 (G:からだ)

この衝撃的なタイトルから「運動したら健康に悪いの？」と気になる人もいると思いますが、ご安心ください。ただ、本書では、「運動には、年齢に即した『適度な強さ』がある」と説明しています。なので、運動には「ほとんど意味のないものや、健康を害するおそれすらあるものもある」と言います。

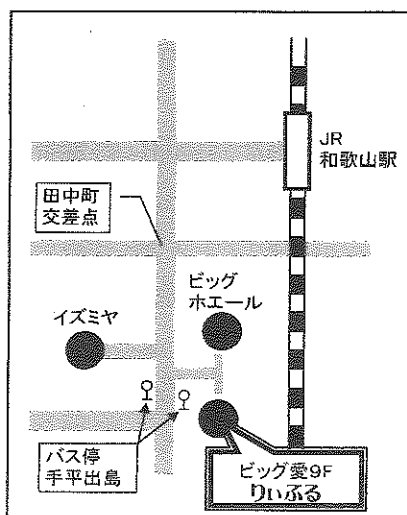
著者が提唱するのは「メッツ健康法」。「中強度の運動」を薦めるもので、メッツとは運動の強度を表す単位のことです。著者は東京都健康長寿医療センター研究所で高齢者の体と健康について研究しており、「メッツ健康法」は研究データに基づいているものです。

日頃の運動不足が気になっていても、具体的にどうすればよいのかまで知る機会は少ないのではないのでしょうか。本書は実践可能で具体的な方法を示してくれています。「運動はやらなくてもダメ、がんばってもダメ」という著者の言葉が気に入りました。 (O.S)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ？ 第19号 (2019年10月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

昨年度イベント参加により、新しくボランティアをしたい人が3人もいました。すでに着物着付ボランティアで活躍の玲さん、2児のパパで音楽イベントやいろいろ地域活動にも参加されているやっくん、元図書委員で社会人1年目の菊山さんです。今後の活躍に期待しています。

★あなたも書評を書いてみませんか？ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。E-mail libreplus@yahoo.co.jp